

北海道立植物遺伝資源センター広報紙

シエネコ

Genesis

第9号



「モロコシ（ほうき用）」

モロコシはイネ科に属する1年生草本で、原産地は赤道アフリカのエチオピア、スーダン地方とされ、5,000年前に栽培がはじめられたといわれている。ここからアフリカ各地に広まり、インド、中央アジアを経て紀元後に中国へ伝えられ、我が国には室町時代に中国から伝来したとされている。元来熱帯産の作物であるが、気象条件への適応能力が高く、現在の栽培地域はアジア南西部、アフリカ、南北アメリカ、南部ヨーロッパ、オーストラリアなど広範囲である。用途により子実用、糖用、ほうき用、に区分される。子実にはデンプン、タンパク質、脂肪が含まれており中国、インド、アフリカ、アジア南西部では食用として今も重要な穀物である。糖用モロコシは、糖蜜の採取やアルコール、ビール醸造用原料として利用される。また、かつて、日本の家庭では掃除用具として「ほうき」が使われていたが、その原料となったのが写真の「ほうき用モロコシ」であった。



発行

北海道立植物遺伝資源センター

〒073-0013 滝川市南滝の川363番地2
TEL (0125) 23-3195・FAX (0125) 24-3877

東ジャワあれこれ

国際協力事業団インドネシア大豆種子増産研究調査員
山崎 忍

JICA海外技術協力の個別（単独）派遣で、インドネシア東ジャワ州の畑作中央種子農場に在勤中の三年間は、公私ともにたいへんお世話になり有り難うございました。住宅は、マラン市内（人口約70万人）に借りて、毎日片道30分の通勤でした。標高500mで、海岸近くのジャカルタやスラバヤより2℃以上も気温が低く、暮らしや

すいところでした。近くには、昔オランダ人、今は中国系の人達の別荘が沢山あるのもうなずけます。折々に撮った写真を並べてみました。きっと、東ジャワが好きになると思います。私も、もう一度行きたいものと思っている昨今です。

（元北海道立植物遺伝資源センター専門研究員）



◀大豆優良種子増殖
研修プロジェクト庁舎(建設中)



▲大豆の播種



▲ヒンズーの守護神



▲盛装の母子(正月)



▲優雅な踊り



▲あぜに豆をまいている



▲日曜日の公園(マラン市内)

パラグアイ、ボリビアにおける豆類(落花生、インゲンマメ等) 遺伝資源の調査収集

北海道立十勝農業試験場

研究部 豆類第二科 佐藤 仁

農水省ジーンバンク事業のミッションとして、鹿児島県農試の木佐貴氏と筆者は豆類(落花生、インゲンマメ等) 遺伝資源の調査、収集を行うため、南米の内陸国、パラグアイとボリビアを探索した。本ミッションは、当初落花生を中心に調査・収集が検討されており、インゲンマメ類の集中的調査はできなかったが、当地における豆類の状況について見識を深められたことは意義深かった。

パラグアイでは北西部に広がるチャコ地方、東部に位置するコンセプション州、中央部のカグアス州、グアイラ州等を探索した。これらの地方では牧畜以外にも綿花、キャッサバ、豆類等の栽培が行われていた。この地方に住むインディオのガラニー族はインゲンマメをハビーラ(Habilla)、ライマメをマンテカ(Manteca)と呼んでいたが、収集できた遺伝資源は少なく、インゲンマメより収量、耐病・耐虫性に優れたササゲが多く栽培されていた。

生物多様性条約批准に伴い、ボリビアを含むアンデス5カ国で国内の遺伝資源を保護する動きが強くなってい

る。本ミッションにおいてもボリビアでの探索に関してボリビア農牧省と協議した結果、調査・収集については許可されたが、国外持ち出しについては日本との遺伝資源の使用に関する取り決めが了承されてからということ、収集物はボリビア農牧省に預けてきた。実際の調査は、落花生等豆類の作付地域であるボリビア南部に位置するタリハ州にて行った。タリハ南東部は平坦な草原地帯であり、トウモロコシ、大豆等を栽培している。収集は平地から山間部でできたが、本地域では落花生が輸出農産物であることから、栽培されているのは導入された単一品種であり、現在では在来種はほとんど見られないとのことであった。このように経済活動の活発化により農産物の規格統一が行われ、遺伝的多様性が損なわれつつある。南米の内陸部にあっても既に貴重な遺伝資源が失われてきていることを肌で感じた。近年、国際社会では遺伝資源の収集が難しくなっているが、発展途上国における遺伝資源収集は「時間との戦い」になってきていると言えるのではないだろうか？



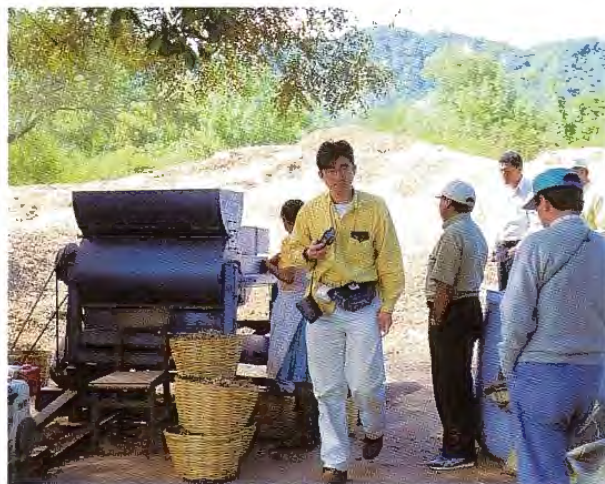
▲パラグアイCRIAにて



▲パラグアイでの収集風景



▲イグアス瀑布



▲ボリビアでの落花生脱殻風景



高知県農業技術センターは、平成3年4月試験研究機関の機構改革により、農業技術研究所、農事試験場、山間農業試験場、園芸試験場、果樹試験場、茶業センターを総合し農業技術センターとして発足した。さらに、農林技術研究所、農事試験場、園芸試験場を統合して旧農事試験場の敷地に庁舎を建設し現在にいたっている。

今回紹介する二つの科は、作物園芸部に所属し研究に取り組んでいる。

【業務の概要】

育種バイオテクノロジー科：野菜、花き等高知県の特産園芸作物の品種改良を行っており、その中で、バイオテクノロジーを積極的に活用するとともに、そのための技術開発を行っている。

- (1) 野菜、花きの新品種の育成
- (2) 組織培養によるウイルスフリー化と大量増殖法の開発
- (3) 品種改良のための非対称細胞融合技術の開発
- (4) 薬培養による野菜の品種改良
- (5) 胚培養による花きの新品種の開発

遺伝資源科：水稲、麦類、大豆などの品種改良とそ

れらの種子生産及び有用遺伝資源の収集保存に関する研究を行っている。

- (1) 極早生水稲、香り米、酒米等の新品種の育成
- (2) 水稲、麦類、大豆の県奨励品種の決定
- (3) 水稲系統適応性検定試験
- (4) 水稲の耐病性、食味などの特性調査
- (5) 水稲、野菜等の遺伝資源の収集、保存と特性調査
- (6) 水稲、麦類、大豆の原原種、原種生産事業

所在地

〒783 高知県南国市廿枝1100

TEL (0888) 63-4911

FAX (0888) 64-1724

編集後記

最近、当センターを訪れる方々は、農業関係者は勿論であるが小学生、中学生、大学生、大学職員、教育委員会等農業以外の分野の方々が多く、参観者の様変わり現象が見られる。参観者に人気が高いのは、栄養系遺伝資源で現在800点ほど保存しているが、将来は6,000点までの保存が予定されている。(編集子)